

「時代おくれ」の教育論

An old-fashioned view of education

船寄俊雄¹

¹ 大阪信愛学院大学 教育学部

要 約

明治維新以降、学校での勉強が客観的に点数化され、それにより進路が決定され、卒業した学校階梯により社会での処遇が決定されていく受験システムが、1960年代の高度経済成長期以降社会の隅々まで広がった。このシステムが作動すると、学びの主体性が後退する。その回復の場が大学であり、大衆化の度合いが年々深まる中で、日本の大学教員は、学生の教育観を問い直し、鍛え直し、学問の面白さを体感させることに腐心してきた。本報告もその系譜に連なるささやかな試みの紹介である。

Keywords : 受験システム、大学生の学力問題、読書、知の足腰、批判精神としての教養

1. はじめに

本日は、私がまがりなりにも35年間大学の教壇に立ってきて、そこで考えたこと、学生諸君に語ってきたことをお話しします。大学生の学力問題という、いじめ問題や不登校の問題や虐待の問題などと比べて、あまりお聞きになる話題ではないと思いますが、私は日本の教育の重要な一断面であると考えてきました。

2. 大学生の学力をどう見てきたか——高偏差値型大学での経験から

1) 偏差値による人生選択——日本教育の特質

まず最初に、日本の教育の特質として、偏差値による人生選択がすべての国民に浸透しているということをお話しします。ずいぶん昔の随筆の冒頭に、次のように書きました¹⁾。

ある人から聞いた話である。ある超有名大学の医学部長さんが、自らの学部の医学生たちに「なぜ君たちはこの大学のこの学部に来たのか」と問うたところ、なんと「(他の大学の医学部は) 偏差値が低すぎて選択の対象になり得ない」との答で一致したとのこと。その医学部長さんはあわてて入試のやり方を変えることを真剣に考えはじめられたそうである。偏差値が若者たちの人生選択の重要な指標になっていることの典型のような話である。しかし、その医学生たちを責めても仕方がない。事はそのような選択を若者たちに強いている教育文化環境そのもののなかにあるからである。

ある超有名大学というのは、ご想像のとおり東京大学のことです。この話をしてくれたある人とは、寺崎昌男と

いう教育学の大先輩の方なのですが、東京大学の教育学部長をしていたときに医学部長さんから聞いた話ということで紹介して下さったものです。もう25年くらい前のことになります。同氏は「あちこちでは是非この話をしてほしい」とおっしゃいましたので、早速『高校のひろば』という雑誌に書き、大学の授業で話をし、今日もそうですが講演会で話をしてまいりました。教育問題は山積みなのですが、私が自らの現場経験を踏まえてリアルに語れる重大な話題です。

スキャンダラスな話に聞こえるかもしれませんが。「なぜ東大の医学部に来たのか」と聞いた学部長さんにしてみれば、「病気の苦しみから人々を解放したい」とか「不治の病を治す特効薬を発明したい」というような熱意ある答を待っておられたはずで、それが全員偏差値で選んだという回答ですからね。しかし、私がこの話を冒頭に持ち出したのは、このエピソードが、明治維新以降今日まで150年に及ぶ日本の教育の重要な特質を表しているからです。東大生だけでなく、すべての国民が大なり小なり、つまり早い子どもだと中学入試において、多くの子どもたちは高校入試において、そして今日だと2人に1人の高校生が受験する大学入試において、偏差値と向き合いながら人生選択をしているからです。神戸大学の学生たちは、高校時代の担任や進路指導の教員から、「偏差値を〇〇上げたら阪大に入れるぞ、さらに□□上げたら京大に入れるぞ」といって励まされたということをよく語っていました。偏差値は若者たちにとって皮膚感覚になっているといつてよいと思います。したがって先ほどご紹介した東大生の話は、特殊な話ではなく、日本の教育の重要な特質を示唆しているというように受け止めていただかないといけません。

2) 偏差値として表示される受験システム

明治維新以降この国の若者たちに用意された教育文化環境というのは、学校での勉強が客観的に点数化され、修了した学校階梯により社会での処遇が決定されていくという受験システムです。1960年代の高度経済成長期以降社会の隅々まで広がりました。このシステムが作動すると、学びの主体性が後退するという現象が起こります。それを二つの資料で確認しておきましょう。次の資料をご覧ください²⁾。

現今の学生たちには自分の確たる目的を定める余裕がない様です。中学校を卒業すれば、直に高等学校の受験準備に取りかゝるといつた具合に、十分考へて居る余裕が与へられてゐない様に思はれます。たゞ中学を卒業すれば、高等学校に入り高等学校を出れば、大学に入る、さうしてゐる中には何とかなるだらう位な計りで、たゞ其の日その日の勉強をしてゐる者も数多くある様に思はれます。

出典は『受験界』という今でいう公務員を目指す人向けの受験雑誌の創刊号の巻頭記事です。今から105年前の1917年、大正6年に刊行されました。これを書いているのは、今の教育制度でいえば東京大学の教授です。当時の東京大学は、女子の入学を認めないというような点で今日とはずいぶん違うので、今の東京大学と単純な比較はできないのですが、100人に1人入れるかどうかという難関大学でした。それだけ難関だということは、受験者はよほど進学に際し確固たる信念をもって受験をしていたと考えがちですが、およそそうではないということはこの資料は示しています。ところてん式に進学を重ねて、東京大学に入ったら何とかなるだろうというような感じで教授の前に座っているわけです。

続いてもう一つの文章をご覧ください³⁾。

現在の勉強と将来の関係といつても、今の日本の現状でいうと、勉強して成績が良ければ一流といわれる高校に行き、そこでも成績がよければ一流といわれる大学に行き、一流といわれる企業に入るときまっている。で、一流の企業へ入れば一般にその人は幸せとされる。本当かどうかは知らない。この状態がいいのか悪い

のかもわからない。しかしそれに従うしかない。従わなければ生活できないからである。

これは中学生の文章で、先に示した文章から 70 年経過していますが、時空を超えた言説の共通性に驚きます。戦前と戦後という大きな時代の断絶がありながら、受験システムという観点から見るとかぎり極めて強い連続性に貫かれていることがわかります。ある学校を卒業したとたんに、何ゆえ進学するのかは問わず次の学校への進学が目標となるという具合に、受験システムの最大の問題点は、眼前の進学が優先されるうちに、肝心の学びの目的が忘れ去られたまま学び続けるという事態に陥ってしまうことにあります。したがって、このシステムの中に生きる子どもたち、それはかつての私たちではありますが、進学することの目的や意味を奪われたまま勉強にいそしむことになります。受験システムの中にいると学ぶ意欲が後退していくということがお分かりいただけるのではないかと思います。

ただ、このシステムも 1980 年代半ば以降揺らぎ始め、現在その渦中を私たちは生きているのではないかと思います。そもそも学力とは、「社会が要求する知的な力の（学校的に屈折した）表現」であり、「歴史的な概念」であります⁴⁾。したがって未来永劫通用する学力など存在しないのであって、もはや学校で獲得する知識は学力の主流ではありません。それは一時的なことではなく、脱受験システム時代が本格的に到来したと考えるべきです。長らく求められて鉄壁を誇ってきた受験システムや学歴社会が本格的に崩れ始めたのです。「微細な『記号』（偏差値や学校ランク）に躍らされる愚を悟り、『実質』（何を学び、何になるか）への回帰がはじまった」わけです⁵⁾。脱受験システム時代の学力については、汐見稔幸さんが「脱産業社会型の学力」と述べ⁶⁾、佐藤学さんが脱「東アジア型」の学力と述べたように⁷⁾、論者により呼称および内容は異なりますが、重要なことは、知識集積型の学力はもはや学力の主流ではなくなったということです。私たちは時代の大きな変わり目に立ち会っています。新時代を切り開いていく新しい学力とは何かを考えることが肝要です。

3. 大学生の学力問題の新たな段階

次に、大学生の学力問題が、新たな段階に入ったことをお話ししましょう。たまたまパソコンで「YAHOO! ニュース」を見ていて（閲覧日は 2019 年 12 月 21 日）、「大学で教えて実感した、『ニュースを読む学生と読まない学生』の知的格差」という記事を目にしました。執筆者は、2018 年 4 月から母校の立命館大学国際関係学部の教壇に立つ白戸圭一さんです。教壇に立つ前に、ベテラン教授から「近年、学生の学力の低下が著しいです。ご自身が学生だった当時の感覚で講義を実施すると、講義を全く理解できない学生が多数いることに注意された方がよいと思います」とアドバイスをもらいます。同学部の偏差値は 60 台後半から 70 位というからかなりの難関大学であり、ベテラン教授がいう「学力の低下」とは、いわゆる受験学力の不足を言っているわけではありません。白戸さんの説明によればこういうことです。

問題を考察するための事例として取り上げたのは、小泉純一郎首相の北朝鮮訪問によって拉致被害者が帰国した際の日本国内の世論であった。だが、この時も、想定外の事態が起きた。小泉純一郎という首相が存在した事実そのものを知らない学生がいたのである。もし、このレベルの学生に講義を理解してもらうのならば、小泉氏という人物の存在を説き、同氏が北朝鮮を訪問した最初にして唯一の日本の首相である事実を説き、拉致被害者の存在を説明し—と話を続けざるを得ない。……当初こちらが計画した水準の講義に到達するまでに、何時間必要なのか見当もつかない。……確かに 30 年前、自分がこの学部の学生だった時にはあり得なかったことが起きていると思わざるを得なかった。

白戸さんは、このような事態が生じる原因が学校教育にあるのではなく、インターネットの発達によって「極論

すれば『個人の自由に基づき、見たい情報だけ見れば済む情報環境』が誕生した結果、同じ大学の同じ学部の中ですら、良質の情報を自発的に獲得しながら能力を伸ばし続ける若者と、抽象的思考を発達させるために最低限必要な知識を持たず、何をどうしてよいかわからない若者との格差が加速度的に拡大している」と述べます。

メディア環境が発達するにつれて知識・情報の学生間格差が拡大するというこの話を、私は教育学部で教員養成教育を担当する者として、目の前の受講生が抱える課題として意識すると同時に、彼らが教育現場に出た時に目の前の子どもたちが抱える課題であるということを受講生に自覚させるという二重の課題があると考えています。

このようにメディア環境の発達、学生たちの成育歴に大きな影響力を持つようになり、ますます大学教育の質を深く問い直さないといけない現在なのですが、私は、これまでの30年間の教育実践において大事にしてきたことをこれからも維持していくしかないと思っています。それは二つあって、一つは学生の教育観・教職観を問い直し、鍛え直すことであり、いま一つは学生に学問の面白さを体感させるということになります。現在の勤務先である大阪信愛学院大学において、これまで同様その二つの事柄を実践していきたいと思っています。

ただこの二つは私のオリジナルではなく、先輩の大学教員たちが目の前の学生たちを見て考えたことです。私が初めて大学の教壇に立った1980年代半ば頃の大学教育論では、ごく常識的なことでした。一つ目の学生の教育観・教職観を問い直し、鍛え直すということ言えば、和歌山大学におられた市川純夫さんは、次のように述べておられました⁸⁾。

私は「教師になりたい」という学生の動機を、……そのままのレベルにして、それに応えるという形での結びつけ方だけでは、大学での学習になっていかないと思っている。……私達の学部（和歌山大学教育学部——引用者註）へ入ってくる学生達は、ほとんどが、小・中・高校と順調に学校教育に乗かって来た優等生の部類といってよい。そういう学生が教師になりたいというわけであるから、教える内容と技術の上っ面の学習を、高校まで通りのやり方でこなして卒業していくということになっては、現在の学校教育のゆがみの拡大再生産に力を貸すだけの教師を送り出すことになってしまうと、恐れるのである。

二つ目の学問の面白さを体感させることについては、当時東京大学におられた寺崎昌男さんが、「偏差値重視の受験体制のもとでは日本の学問は死ぬのではないか」、「学生たちが学問することの面白さというものを実感することがたいへん難しくなっている」とおっしゃいました⁹⁾。1984年のことでした。そして、同じ論文の中で、学生たちに学問の面白さや学問することの手ごたえを分からせるために、「具象的な事物、具体的な技術、それを通して初めて理論を駆使することを体験させ、未知の答えを模索することの歓びを感得させることができる。その上で初めて、文献を使つてのことばや概念の獲得と理論探究ができる。それはおそらく『学び』への出発の第一歩なのである」（11頁）と述べ、二人の経済学者の言説を次のように紹介しています（4～5頁）。

- ・私の大学には、偏差値型の学力と言えまあまあのところの学生が入ってくるのですが、それでも学問の面白さが分かるまでには相当の時間がかかります。私は“井戸掘り”をさせるのです。徹底的に一つの会社の経営分析をやってみる。あるテーマのもとに会社史のケース・スタディをする。そういうことをやる中で、初めて学問に意欲を持つようになります。
- ・ゼミをやっていて、学生たちに“実務”的な作業をさせることが何より大切だと思うようになりました。たとえば、簿記や財務分析といったような科目をしっかりと受けさせ、言わば“実学”的な訓練をすること。こういった訓練は、これまで大学の経済学教育の中ではともすると馬鹿にされてきました。しかしそういう科目をしっかりと受けさせ、技能をきたえること、それが経済学教育の基礎ではないか、と痛感します。

4. 紙の本を読む癖をつけること

では次に、この二つの事柄を、私が自らの教育実践を通じてどのように実現しようとしているのかについてその一端を紹介しましょう。まず、学生の教育観・教職観を問い直し、鍛え直すことについて、長年担当した「教職論」という、教員免許状を取得するための必修科目を事例に説明しましょう。履修者は入学したばかりの1年生です。事前に配布する授業概要の冒頭に、毎年次のような「授業の目的」を記しました。

本授業は、教員免許状取得のための必修科目だが、そのことを念頭から消してほしい。授業者は、学校の教員とは「学びの達人」でないと務まらない職業であると考え、残念ながら本学に入学してくる学生諸君は「学びの達人」には程遠い人たちである。そのことの意味を考えることが第1の目的である。「学びの達人」になるための重要な手段は、紙に印刷された書物を読むことである。本授業では読書をしてもらう。これが第2の目的である。

授業の最初の時間に、この二つの目的を確認した後、半期（半年）の間に指定したブックリストから5冊の本を読んで読書感想文を提出するという課題について説明します。本といっても学術書ではありません。文庫、新書、ブックレットの類であり、図書館に受講生分を備え付けることは不可能ですし、本は身銭を切って購入する気風を身につけさせたいので、廉価本を40冊ほど並べています。灰谷健次郎『兎の眼』『太陽の子』、重松清『卒業』『せんせい』、水上勉『ものの聲ひとの聲』『虫のいのちにも』、三上満『眠れぬ夜の教師のために』、金森俊朗『「いのち」の教科書』、谷昌恒『いま教育に欠けているもの』などであり、少し硬めの本としては宇沢弘文『日本の教育を考える』が入っているくらいです。中には絶版になっている本もありますが、公共図書館には必ず所蔵されていますし、インターネットの古書通販でも購入できます。

それらの中から灰谷さんと重松さんの作品は必ず1冊ずつ入れることを条件にして5冊を読ませています。重松さんは現役の作家ですからとにかく、灰谷さんの作品は、私が読ませないともはや学生は存在すら知らないままに一生を終えることになるので、強制的に読ませることにしています。私が大学生の頃、1970年代半ばから後半のことですが、「灰谷を読まないで教育現場には立てない」と先輩たちから言われた教を忠実に守っています。灰谷さんの作品に対して、そのテーマとしての普遍性に気づかず、単なる古臭く読みにくい話として受け止める感想がよく出てくるので、「源氏物語よりずっと新しいではないか」と言うのですが、なかなか納得顔をしないのが常です。したがって、経済成長とともに変貌する日本社会のことや競争主義的・管理主義的教育環境が形作られていく時代背景を、映像資料を交えながら丁寧に説明していきます。『兎の眼』を切り口にして、当時の勤務評定や全国一斉学力テストで揺れた教育界と、今日の教員の人事考課制度と全国学力テストが常識と化した教育界が実は通底していることを理解させるという授業を行います。白戸さんの話と同じく相当の時間数を使わないと一通りの理解は得られません。それでも、学生たちの感想の中に、「通学の電車の中で読んでいて、思わず涙が出てきて、あわてて本を閉じた」などという文言があったりすると、「読んでみるものだろ」と一人ひとりにほくそ笑みます。将来彼らが教師として教壇に立った時に、子どもたちに教科書をはじめ紙の本を読ませることになりますし、本好きの子どもに育てておけば間違いはないと思うわけで、自らが本を読まない教師など存在しえないと考えます。

本を読むことの必要性を説得するための補強材料として、「スマホやめるか、大学生やめるか」と新入生に入学式の式辞で迫ったことで話題となった山沢清人信州大学長（当時）にまつわる新聞記事（『朝日新聞』2015年4月8日）、スマホを横に置き読書せよと訴えた石井洋二郎東京大学教養学部長（当時）の2014年度入学式の式辞（東京大学教養学部のホームページより取得）、「教科書などを安易に電子化してしまったら、取り返しがつかないこ

とになるでしょう。さらに思考や創造力までをAIにゆだねるようになってしまったら、人間の希望である藤井さんの『神の一手』が、もう出なくなるかもしれないんです」と述べる言語脳科学が専門の酒井邦嘉東京大学教授に取材した新聞記事(『朝日新聞』2019年11月28日夕刊)を配布して読ませ、あげくの果てにはニンテンドーDS用ソフト「脳トレ」の監修者で、『スマホが学力を破壊する』(集英社、2018年)を出版し、その中で「もし、これからも安寧な社会の継続を願うのであれば、人類の文化の深化と成熟を祈るのであれば、スマホを捨ててはいけません」(4～5頁)と書いている川島隆太東北大学教授の理論の紹介を行います。

説明はそれだけに留まりません。インターネットに掲載された不特定多数の読書感想文から、コピー&ペーストによって作成した「作品」を読まされることに対する注意喚起を行わなければならないからです。試みに「灰谷健次郎『兎の眼』感想文」とパソコンに打ち込んで見ると分かりますが、そこにはパクリ放題と言ってよいくらいの感想文が出てきます。下手に自分で書くよりも簡単な操作で美しい文章ができるということになれば、最小限の努力で最大限の成果を得るという受験の修練を積んだ学生は、コピー&ペーストにほとんど無意識に手を染めることになります。この問題にはどの大学も頭を悩ませていて、例えば東京大学教養学部は、2015年3月10日付で「期末レポートにおける不正行為について」というコメントを発表しています。それによれば、「本学部後期課程において、平成26年度冬学期の期末の課題として提出されたあるレポートの文章の約75%が、インターネット上に公開されている文章からの引き写しであることが判明しました。言うまでもなく、他人の文章の無断借用は剽窃であり、その行為が学問倫理上許されないことは明らかなです」と述べ、「その学期に履修した全科目の単位を無効とする」という規定に則り、「厳正な処置をとった」とのことです。この発表は同学部の公式ホームページに掲載され、同学部は広く世界に恥をさらしたのですが、そのことにこの問題を決して許さないという並み並みならぬ覚悟を感じます。

したがって私の授業では、学生たちにことの重大性をリアルに把握させるために、私が見つけた過去の剽窃感想文を例示し、「私は必ず見破る。見つけたら単位は出さない。ただし私の仕事はコンビニで万引を見張ることではない。諸君に読書を勧めることだ。私に警備の仕事ではなく教師の仕事をさせてほしい」という話を穏やかに丁寧に述べます。

5. 「知の足腰」の鍛錬

次に、学生に学問の面白さを体感させることについて、もう一つ授業を紹介しましょう。それは「教育学研究法」という名称で、2年生になって教育学を勉強するコースに入ってきた学生たちに提供される入門の授業であり、最大でも15名程度なので演習形式で行っていたものです。学生たちは大学で初めて演習という形式の授業、調べ学習と討議の学習を経験することになります。その授業のテキストとして重宝した文献が、山中恒・山中典子著『間違いだらけの少年H』(辺境社発行・勁草書房発売、1999年)でした。ベストセラーと言われる妹尾河童著『少年H』(講談社、1997年)の上巻の誤りを徹底的に追究した本です。これをテキストとして、学生たちに、山中恒・典子両氏が『少年H』の間違いを精細に論証した後を追いかけるわけですが、テーマを自分で考えるわけではなく、論証すべき資料を自分で考えるわけでもないし、作業そのものはいたって単純です。

どんなことを学生たちはやっているのかイメージしていただくために、例を挙げてみましょう。1941年、昭和16年の話です。4月に尋常小学校が国民学校と名称が変わり、5年生になったHが友だちと映画を観に行きます。ところがその日付が分かりません。『少年H』という本は全体に時制がはっきりしませんが、歴史では何月何日にということがあったということが大事なので、山中さんは日付を追究します。学校が休みなので日曜日のようです。家に帰るとちゃぶ台の上に新聞が置いてあり、見出しに「日ソ中立条約締結」と書かれています。日ソ中立条約が締結されたのは1941年4月13日ですが、日本時間では午後9時になり、内閣情報局から発表があったのが夜の11時過ぎですから、それが新聞に載ったのは4月14日月曜日の朝刊ということになり、前日の朝刊で見

ているというHの証言は間違いだということになります。そのことはここでは横に置いてHの話を読み進めると、4月13日に神戸の新開地にある松竹座に『砂塵』を観に行ったとあり、資料（本稿では省略する）を観ていただくと、確かに松竹座で上映されています。ところが、その広告には「十四才以下は見られません」と書かれていて、Hと友だちは映画館のおばちゃんに追い返されます。仕方なしに近くの聚楽館に行って「振袖御殿」を観て帰ったと書いてあるわけです。ところが『神戸新聞』の映画欄を見ていただくと、ちょっと印刷が不鮮明で見にくく恐縮ですが、一番右が聚楽館で、かかっているのは「十日間の人生」という映画になっています。もう一つ上の映画欄を見ていただくと、確かに前の週には「振袖御殿」はかかっていた。だから「振袖御殿」を観たのであれば4月6日の話であり、13日ではないということになります。そういう山中さんたちの考証過程を学生たちに追跡させるわけです。

この授業で私が学生たちに求めていることは、山中さんたちの後をたどって図書館に行き資料を収集してくるということです。高偏差値を誇る彼らに求めていることはそういうことです。けっして高尚な議論をかわしているわけではありません。言い方を変えると、そこから始めないといけないのが現状であるということになります。自分の足で図書館に行って、少々手間取りながら資料をとってくる。先ほど提示した資料は、そうして学生たちがとってきた資料です。そういうことをやることによって、受験生のときには参考書と問題集を持って入って自習する場所だと思っていた図書館が、実は資料の宝庫であり、調査学習のためにある所だと理解してもらうことがねらいなわけです。山中さんたちの本をテキストとして使う理由は、戦時中の教育のありようを理解することもあるのですが、それよりも図書館に行って、きちっと事実を確認するためです。そういう学習は、簡単な読書感想文なら本を読まずとも「コピー＆ペースト」で書く力をもち合わせている学生にとって苦痛のようです。最初は面倒臭そうな顔をしている学生たちが多いのが毎年の常でした。しかしそういう学習を重ねていく中で、自分が知っていると思っていた知識が実は曖昧であること、高校までの教科書には書かれていない面白いエピソードがいっぱいあること、単純に知らなかったことを知っていくことの面白さ、自分の足で調べることの意味が少しずつ理解できるようでした。一昨年（2021年）3月に神戸大学を退職した折り研究室の修了生たちが作ってくれた文集に、隣の研究室の修了生の平野亮さんが、その授業に対し次のような思い出話を寄稿してくれました¹⁰⁾。

先ず何よりも、報告資料を作成するために戦前の新聞等の“古い史資料”に触れた初体験は鮮烈でした。六甲台の図書館書庫に学部生は入れず、何冊もの文献を司書の方に取り出してもらったこと、台車に乗せて運び、恐る恐るめくって一つ一つ記述を確認したこと。それら全てに緊張し、興奮したことを楽しく思い出します。先行研究の読み込み、史資料の検討と再検証、報告、そして全員での議論。それはまさに「研究」法そのものであり、思えば、その後私が「教育史」研究の未知に入る（迷い込む）、最初の一步になりました。

彼は、灰谷健次郎『兎の眼』が「生まれて初めて“面白くてやめられずに朝まで読む”読書体験をした本”だとも書いてくれているのですが、私の大学教育の意図にももの見事にはまった人ということになります。

労を惜しまず、自らの足で調べ、自らの頭で考えることを、私は、小林康夫・船曳建夫編『知の技法』（東京大学出版会、1994年）になぞらえて「知の足腰」と呼んでいます。それが、私が考える新時代を切り拓く新しい学力です。別に目新しいことでなく、昔から言い古されてきた学力観に基づいて考えることで十分です。受験学力に象徴される暗記中心、知識集積型の学力に対して、昔から人々は「真の学力」こそ大事であると批判してきましたが、その場合の「真」に相当するものが旧くて新しい学力です。「真」の中身は何か。かつて私がカリキュラム設計に関わった神戸大学附属中等教育学校を例にとれば、「見つける力」「調べる力」「まとめる力」「発表する力」「考える力」の五つの「力」がそれに相当します。論者によって表現の仕方や力点の置き方は異なるでしょうが、学力の内容としてこの五つの力は最大公約数的な存在であると考えます。

そしてこれらの「力」は、教科の学習と並行して1年生（中1）から6年生（高3）の7月の卒業研究まで行われる総合学習を通して、「生きて働く力」へと転化させることが企図されています。では、「生きて働く力」とは何か。そのことを考える上で示唆を与えてくれるのが、東京大学教養学部長であった石井洋二郎さんによる2014年度の卒業式での式辞です（同学部のホームページに掲載、閲覧日は2015年4月10日）。石井さんは、1964年3月に挙行された東京大学の卒業式で、大河内一男総長がしゃべった『『肥った豚よりも痩せたソクラテスになれ』と言った』という有名な語り伝えには、三つの間違いが含まれていることを述べました。一つは「大河内一男総長は」という主語が違うこと、二つ目は「肥った豚よりも痩せたソクラテスになれ」という句は、ジョン・スチュアート・ミルの言葉のまったく不正確な引用であること、三つめは「言った」とあるけれども、当日大河内はその部分を読み飛ばしてしまっていて実際には言っていないことの三つであります。つまり、「大河内一男総長は『肥った豚よりも痩せたソクラテスになれ』と言った』という有名な語り伝えは、一箇所も真実を含んでいないということなのだとおっしゃるわけです。

そして石井さんはこの話の後次のように述べました。

何が言いたいかと申しますと、まず、皆さんが毎日触れている情報、特にネットに流れている雑多な情報は、大半がこの種のものである と思った方がいいということです。……あやふやな情報がいったん真実の衣を着せられて世間に流布してしまうと、もはや誰も直接資料にあたって真偽のほどを確かめようとはしなくなります。情報が何重にも媒介されていくにつれて、最初の事実からは加速度的に遠ざかっていき、誰もがそれを鵜呑みにしてしまう。そしてその結果、本来作動しなければならないはずの批判精神が、知らず知らずのうちに機能不全に陥ってしまう。

このように述べた後に、石井は「こうした悪弊」を断ち切り、「あらゆることを疑い、あらゆる情報の真偽を自分の目で確認してみること、必ず一次情報に立ち返って自分の頭と足で検証してみる」という「批判精神」こそが、「教養学部生」に求められる「教養というものの本質」であると続けました。

「あらゆることを疑い、あらゆる情報の真偽を自分の目で確認してみること、必ず一次情報に立ち返って自分の頭と足で検証してみる」という「批判精神」は、東京大学教養学部の学生たちが備えるべき「教養」として語られていますが、その内容は、現在の日本の小学校・中学校・高等学校・大学のそれぞれの階梯で育てられなければならない学力を指し示していると言えます。

註

- 1) 拙稿「人生という大学」『高校のひろば』第26号、1997年、90頁。
- 2) 「受験準備に際して」『受験界』第1巻第1号、1917年、4頁。
- 3) 橋爪貞雄編著『なぜ、こんな勉強するの』黎明書房、1986年、65頁。
- 4) 汐見稔幸「学力『低下』問題と新たな学力形成の課題としての総合学習」『教育』第50巻第2号、2000年2月、10頁。
- 5) 竹内洋『立身出世主義〔増補版〕』世界思想社、2005年、259頁。
- 6) 汐見、前掲註4)、12頁。
- 7) 佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』岩波書店、2000年、31～38頁。
- 8) 日本科学者会議教育問題委員会原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』第1巻、水曜社、1983年、118～119頁。
- 9) 寺崎昌男『大学教育の創造』東信堂、1999年、5頁。初出は『理想』第611号、理想社、1984年4月。

10) 平野亮「〈中年H〉より」船寄俊雄教授ご退職記念事業実行委員会編『船出』同、2021年、209頁。

〔参考文献〕（順不同。講演で言及したものは除く。）

- ・寺崎昌男「大学生の『学力』について——立ち枯れつつある『ものを学ぶ』能力」『文研ジャーナル』第177号、1980年。
- ・寺崎昌男「ふたたび大学生の『学力』について——新入生たちの“知性”のこわばりと固さ」『文研ジャーナル』第181号、1980年。
- ・拙稿「時代おくれ」『高校のひろば』第28号、1998年。
- ・拙稿「学校図書館と教育の変革」塩見昇編著『教育を変える学校図書館』風間書房、2006年。
- ・拙稿「願う！学ぶ意欲の回復——「知の足腰」の鍛練」『図書館界』第67巻第2号、2015年。
- ・拙稿「教員養成における学問とは何か」『日本教師教育学会年報』第29号、2020年。
- ・酒井邦嘉『脳を創る読書』実業之日本社、2011年。
- ・新井紀子『ほんとうにいいの？デジタル教科書』岩波ブックレット、2012年。
- ・榎本博明『教育現場は困っている』平凡社新書、2020年。
- ・山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち』ポプラ新書、2020年。

〔付記〕

本稿は、2022年6月25日に行った、枚方子ども会議30周年記念講演における発表原稿に修正を施したものである。私の原稿を本紀要所定の書式に整備してくださったのは、西九州大学子ども学部講師の宇賀神一さんである。記して謝意を表する。

受理 2023年2月1日

公開 2023年4月1日

〔連絡先〕

船寄 俊雄

〒536-8585 大阪市城東区古市2-7-30

大阪信愛学院大学教育学部

E-mail : funakit@osaka-shinai.ac.jp